

指導者（保護者）として大切にしたいこと（その48）
～「甲子園大会決勝の裏話」～

2023年8月吉日
U12部会広島地区
SV 大庭 浩資

広島県バスケットボール協会U12部会広島地区の保護者の皆様、指導者の皆様、役員の皆様、いつもお世話になっております。

また第47回全関西ミニバスケットボール交歓大会でのご協力、本当にありがとうございました。久しぶりの54チームでの開催でしたが、皆様のおかげで無事終了できたこと、心よりお礼申し上げます。

さて、今年の全国高校野球大会は例年以上の盛り上がりを見せましたね。

107年ぶりの優勝かそれとも連覇かが注目されましたが、慶応高校の見事な優勝で幕を閉じました。

両校のすばらしい戦いは心に残りましたが、思い起こせば広島県代表の広陵高校も3回戦で、優勝した慶応高校にタイブレークで敗れましたし、仙台育英も大阪・履正社と4対3の試合をしました。

本当に勝負は紙一重です。勝負の世界は勝つ者がいれば負ける者もいます。

スポーツに「たら、れば」を言うてはいけません、あの時広陵高校が慶応高校に勝っていたらどうなっていたかとついつい思ってしまう。

そんな中、今回のコラムのテーマは「裏話」として、慶応高校、仙台育英高校の監督さん、二世選手についての話を紹介したいと思います。

私自身も、これからの指導、部員とのかかわりの参考にしたいと思います。

「監督さんは幼稚舎（小学校）の先生」

優勝した慶応高校の森林監督は、高校の先生ではなく、慶応幼稚舎（小学校）の3年K組の担任を務める。三塁側アルプスからは「もりば～頑張れ～」と制服姿の子どもたちの声援が飛んだ。生徒からは「もりば」と呼ばれる。

「小学生と高校生の両方を見るのは他の人にできないメリット。小学生を見てから高校生を見ると立派な部分を感じる」と指導にも生かしている。

この話について、実は私も同じことを感じています。

私自身、これまで指導しているチームの選手に対して、どちらかというといけない点ばかり指摘してきました。

それがこの春から仕事の関係で、1年生や2年生と関わるが増え、その子たちの様子を見てからチームに戻ると「さすが高学年！」と思える部分、きちんとできている部分、がんばっている部分をたくさん見取ることができるようになりました。

「人生は敗者復活戦」

敗れた仙台育英高校の須江監督は慶応に向けて何度も拍手を送った。

指揮官の座右の銘は『人生は敗者復活戦』。

小学2年生から野球を始め、中学時代は地元では有名選手。だが、仙台育英入学直後、あまりのレベルの高さに「場違いなところに来た」。

選手では生き残れないと思い、2年生秋から学生コーチに就任。大学でも同様に学生コーチを務めた。その「裏方経験」がリーダーとしての礎だ。

「2年連続決勝の舞台に立てるなんて奇跡ですし、金メダルと銀メダル2つを持つてるのって幸せな人生だなと思います」と振り返った。

366日の間に甲子園優勝と準優勝を経験した。

「座右の銘の通り、人生は敗者復活戦だと思っているので、素晴らしい経験を得ましたね」。

敗戦は新たなスタート。負けたままでは終わらない。

「負けることは大切だ」「負けた時の方が得るものが多い」と言われますが、たしかにその通りですね。

でも同じ負けでも、本当に努力をしたからこそ感じられる「負けることの大切さ」があるのだと思います。

「立派に育ってくれた」

慶応・清原選手（2年生）は、親子で日本一を達成した。「全員で勝てた試合。みんなに感謝です」。

「清原」の名前に苦しんだこともあった。父・和博氏は甲子園通算13本塁打を放ち、プロ野球でも525本塁打の記録を持つ。

昨秋、試合に出始めるようになると周囲からは父のような活躍を期待される重圧を感じた。そんな時、母・亜希さんは「死にはしないから、ど〜んとやってこい」。悩んでいた自分にとってとても大きく、救われる言葉だった。

父・和博氏は「私の息子であり注目され、試合に出なくても取材を毎回受けるなど苦しさもあったと思います。しかし、きちんと対応して立派に育ってくれたなど感じました。褒めてあげたいです」。

わずかな単位不足で1年生を2度経験したため、2年生ながら高校野球の公式戦に出られるのは最後。「苦しいことばかりの3年間だったけど、仲間が支えてくれてやり切れた。支えてくれた皆さんに今回で少しは恩返しできたかなと思う」。

「覚悟を持って」

慶応・森林監督の長男・賢人外野手（3年生）は三塁側アルプスからチームメイトとともに大きな声援を送った。「ちょっと涙出ちゃいました。いつもありがとう、おめでとうと（声をかけたい）。かっこよかったです」。尊敬する父へ視線を送った。

「僕も慶応で野球がしたい」。同じユニフォームを着る覚悟を決め中学受験に挑んだ。

「父と一緒に甲子園」は高校の野球部入部を決めたとき目標に掲げた。「立場上、厳しい目で見られるけど覚悟を持って」と父の言葉を胸にプレイした2年半。ベンチ入りはできなかったが、「覚悟」を決めアルプスから声でチームを支えた。

幼少期、一緒に高尾山などに登ったのが楽しい思い出。歩きながら野球談議に花を咲かせた。「甲子園が終わったら、また一緒に山登りをしたい」。

父と息子に戻り、また頂を目指す。

それぞれのチームの選手の皆さんも、こうした親の愛情、周りの人の愛情に支えられているからこそ、日々の苦しい練習を頑張ることができるのでしょうね。

これからも多くの人を支えに対する感謝の気持ちを忘れないでほしいものです。